

日本基督教団 八ヶ岳伝道所 平和を祈る日の礼拝 NO.1132 礼拝時間 10:30~11:45

2020年8月9日 牧師 山本 護 司式 福田 奈里子 奏楽 山本 恵美

前 奏 黙想	祈 禱
讃美歌 31 わがみかみよ	讃美歌 531 ころのおごとに
祈 禱	献 金
信仰告白 日本基督教団 戦責告白	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書 詩編 51:12~14	黙 禱
ガラテヤの信徒への手紙 5:1	主の祈り 564
讃美歌 420 世界のおさなる	頌 栄 544 主イエスのめぐみよ
説 教『自由はつらいよ、それが救い』	祝 禱 後 奏

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてならない(ガラテヤ 5:1)」。つまり以前は、奴隷の軛につながれていたが、今は自由の身になっているらしい。それにしても自由とは何か、奴隷とは何であろうか。

10年前、伝道所の平和集會に90歳の森井眞先生(1919~)をお招きした。先生はカルヴァンの研究者で明治学院大学の元学長。一兵卒の先生は、高射砲台があった隅田川は向島での軍事教練で、重い背囊を負って走らされていた。道々、白髯橋のもとで一人の乞食が蚤を取りながら気ままに過ごしている姿を毎日見かける。その度に先生は「羨ましくて涙がこぼれた」、と絞り出すように語られた。

森井先生が見た乞食は、なぜか私の記憶として折々に甦ることがあり、不可思議な安堵を覚える。累々たる死の戦禍だけが悲惨なのではない。キリスト者にとっては、自由な信仰や生き方を奪われることも悲惨なのだ。古参上等兵は新兵をイジメることで世に復讐し、新兵は上官の顔色をうかがうように躡られる。全体主義の世にとって自由は、信仰と希望と愛(1コリント 13:13)のように忌々しい。

キリストによって自由の身になると実際どうなるのか。「あなたがたはもはや奴隷ではなく、子(4:7)なのだ。「あなたがたが子であることは、神が〔アッバ、父よ〕と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分る(ガラテヤ 4:6)」。イエスが神を「アッバ、父よ」と呼んだように、私たちは聖霊を受けている自由な神の子として、親しく、遠慮なく、素朴に、神を「アッバ、父ちゃん」と呼ぶ。この関係を実現させるために、御子の犠牲と父ちゃんたる神の、はかり知れない痛みがあった。

「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してください(3:13)」。すなわち、十字架だ。私たちの自由を買い取るために、それほどとてつもない犠牲が支払われている。「だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはならない(5:1)」。

自分で考えず、自分で決断せず、自分で責任を負わない奴隷は少なくない。奴隷とは人間の未成熟状態のことで(4:3)、戦争遂行には人間を未成熟のまま奴隷化させればよい。戦争を止め、平和を実現するためには、神の子として自由になること。正確には、すでに自由の身にされている私であると気づくこと。「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった(5:1)」。

「御前からわたしを退けず、あなたの聖なる霊を取り上げないでください(詩編 51:13)」。神の霊から引き離されると、私たちは世の奴隷にされる。「御救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください(51:14)」。自由の霊(風)に吹かれることこそ救い、人間としての真の喜びなのだ。

人間を成熟させない奴隷集団から、森井先生を落涙させて救い出した白髯橋の乞食は、イエスだったか。奴隷の一員になれば古参上等兵のイビリも減っただろう。キリストの自由を示されることはさぞや辛かったろう。自由とは、そういうことだ。辛くとも自由こそが救いであり、信仰であり、希望であり、愛なのだ(1コリント 13:13)。イエスとの深い出会いでは、神の痛みを幾らかでも覚える。

私たちは日々新たな聖霊を受け、創造され続けている(詩編 51:12)。平和の実現は幻想ではない。

白髯橋の乞食は物乞いし 残飯で生をつないでいる 帝国軍人は一兵卒でさえ三食米を食っている  
それでも自由がいいか 現人神の赤子ではなく キリストによる神の子がいいのか 迫力ある問い

**礼拝開始時刻の変更。**8月16日~当分の間、礼拝を①9:30~10:30、②11:00~12:00の二回行います。  
三密回避の試みで、とりあえず自由にどちらかの礼拝へご出席下さい。CSをする場合は9:00~。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳伝道所」で検索して下さい。

## 第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（戦責告白）

わたくしどもは、1966年10月、第14回教団総会において、教団創立25周年を記念いたしました。今やわたくしどもの真剣な課題は「明日の教団」であります。わたくしどもは、これを主題として、教団が日本及び世界の将来に対して負っている光栄ある責任について考え、また祈りました。

まさにこのときにおいてこそ、わたくしどもは、教団成立とそれにつづく戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、今一度改めて自覚し、主のあわれみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。

わが国の政府は、そのころ戦争遂行の必要から、諸宗教団体に統合と戦争への協力を、国策として要請いたしました。

明治初年の宣教開始以来、わが国のキリスト者の多くは、かねがね諸教派を解消して日本における一つの福音的教会を樹立したく願ってはおりましたが、当時の教会の指導者たちは、この政府の要請を契機に教会合同にふみきり、ここに教団が成立いたしました。わたくしどもはこの教団の成立と存続において、わたくしどもの弱さとあやまちにもかかわらず働かれる歴史の主なる神の摂理を覚え、深い感謝とともにおそれと責任を痛感するものであります。

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。

しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

終戦から20年余を経過し、わたくしどもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中にあって、ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。

1967年3月26日 復活主日 日本基督教団総会議長 鈴木正久

※八ヶ岳伝道所では、毎年8月15日敗戦の日直前の主日礼拝で、この「戦責告白」を唱えています。総会議長によるこの歴史的告白を、日本基督教団に属する教会として自らのものとし、キリスト者としての戦争責任をしっかりと自覚する機会にしましょう。